



序

蓋誅諧以神骨為至神骨  
 不凡則雖有凡者寡焉神骨  
 凡則雖有非凡者寡焉惟吾  
 芭蕉翁志絕羣伍委身烟霞  
 與物无競神骨洒如惟洒如故  
 菁華之蘊與彼春笑秋粧亦  
 發而動于吟咏之間者自然  
 不凡有  
 足動人者焉蓋翁之前无翁之



後无翁實斯道之宗師矣哉翁  
沒之後其徒愈多益分各名于  
其家此不可豔稱矣要之皆无翁  
之神骨唯无神骨故口誦風月言  
則立羶場惟立羶場左媿然脂  
韋取氣為務則其動於風咏之  
間者不能不鄙且背矣則心勢之  
所到无足怪者矣獨家烏明翁  
則不然以无翁之骨為骨以翁之神

為神則于菁華之與素笑秋粧  
未曉曉而後者亦有些翁不異  
者則其骨即翁之骨其神即翁  
之神謂翁不死可矣自翁之  
沒百年於今越若八月四日  
謹祭于墓遂集百斯徒乃  
求于刻石錄為一冊子名曰  
池之昔嗚呼朽者其骨也存者  
其神也則此舉也神不氏

樂手

寛政癸丑秋八月

館藩島彪撰



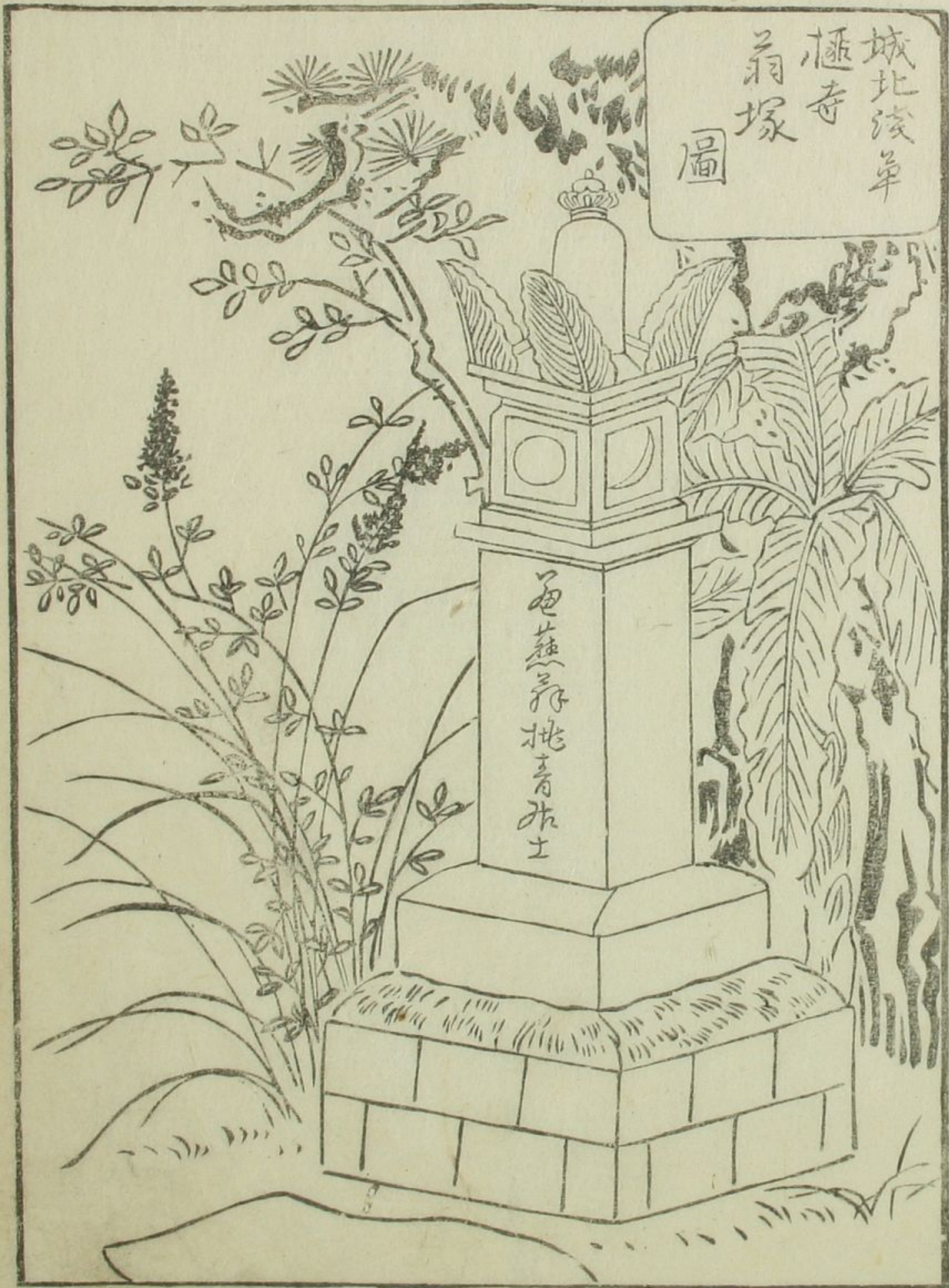
叙



極と一塚も年と経み極のその樂ハ多量  
集む人姓一五十回忌廻り禮の事也取  
而田忌とあまうやそれお流産を心を  
塚を築ふに石灯籠を積まふその趣意を  
集むの文子事一以経を今更の事を  
以てまに思ふ子池をあらうの事を  
あす心おけ極を一を姓者集む事  
中に海あり一麓あり一嶺を池  
中とよむ傍景

ありをたぬきしつゝ奇なる所の所也園中に極接  
ありて大なるうのすもも温更形も星かきなり  
栗つらんと文雅林と名きつゝも極寺とて山嶺を  
池中山とつゝ六年十月世々現住絶望高云上人  
孫能を不子勅しつゝこの山内は建隆の文章の  
詳なり一高踏東海坊池の會しつゝを喜像しつゝ  
以て廿五年を築池邊の秋舟舟の徳心も  
おれ久く極も接も實を結ぶる眼も貫はし  
是所直へ向ふ水清く西跡一ありて世々もに

書しつゝ極も接しつゝの空のきらび江の意に喜き  
少時やも源もまらつゝめり花小秋も雲もかき  
れまひ子の思ひしつゝも結ぶるもく流花は  
流しつゝ秋の風もつらつゝなれぬるも鏡もつゝ  
寂も更ぬもそをも見結をゆはしつゝもかき味  
ふしつゝ奇觀もやも中流しつゝこの山のおもは  
今入る始つゝの心もまあてけも集るとあす歌字も  
ひよとも求のた造化の海を智のまに池は  
母もしつゝかきももも報を述とつゝ初文も六の



好しき筆書を以て志を述ぶるも其の心は  
 經文を知らずして何となく其の心は  
 其の心は其の心を知る事なき事なき事なき  
 當と云ふ事なき事なき事なき

寛政五ツの年

後蘇子地

日榜





同所  
泉水池之景

堅土砥頂

此中上のちちこはくして  
名もや池とめくして  
取もたつて

高名彫

松平筑後守

社より言次持立

左 碑

松平のちちこ  
見よる也  
徳樂像  
高名彫  
高名彫

右 碑

高名彫  
高名彫  
高名彫

元禄七年歲次乙酉十月三日  
族富奉命江州築前守  
為忠再托書於之  
宣元政五年歲次癸丑正月  
東都修築高名彫謹誌

場中瘞藏

一 古くは紙子御用冊 一 紙 生積寫

一 露積書子先師真蹟御用冊 一 紙

一 自筆御用冊 一 紙 現任中紙筆寫功

一 案箋仰多羅尼經一部

但紙金泥

南總大寺城外觀音寺堂能法印遺筆

一 香古渡如羅 能者功

以上五品一臺に納て箱中埋む

臺上客附

一 古くは紙十二日の 二 臺

一 唐牌御用冊金紋四五品一臺平極書

本強有紙目松子紙子寫り紙子客附

一 朝夕茶湯の具 玄縁蓋茶其全トモ

吾名軍亭春童子平茶鏡酒什物客附





深き水の久しきあらしの中ニ踏  
 留師あらしきる本坂の築  
 多つた扇子あらしきるを  
 扇影  
 在る城子深き夢を思  
 風をさるあらしきるけの夢  
 思言く驛路の流の山越るは  
 中れも人子逢ぬ字津の音  
 雲水の身子あらしきの鏡  
 春南

水石  
 橋路  
 柳條  
 扇影  
 詩子  
 驛路  
 左布  
 春南

見詰し深き水のあらし  
 陽あけの雲あらし出きあらし  
 萱根あらしきる夢の音  
 若きあらしかみあらしきるあらし  
 日あらしきると気持あらし  
 扇影の琉球あらしきる下あらし  
 一様あらしきるあらしの鏡  
 深き水のあらしきるあらしの鏡  
 水つるあらしきるあらしの鏡

水石  
 知也  
 枕馬  
 舟里  
 燈倍  
 可名  
 扇影  
 左布  
 水石

〆川の香の相傳るはく引きま  
 了し結しち無かりて後  
 去り実の雌を以てく木かりし子  
 妻中く留ありし置りり  
 鳴咽をわきそそ痛きなりけり  
 ありしとちと新海の世あり  
 福吟子連舞一折 秋のくち  
 人質を務 終るに君  
 出くはも十こま管の吹音あり

柳緑 白雲 梅枝 之耕 烏夢 清風 芦洲 印川 如扇

二ウ

廊のちこるを降く浪井  
 ちちありま藤橋のひこ結  
 安行新をそとく藤系地付  
 肉もわたりハ仕別しおころを地  
 女身はくく各をちめり  
 夕くく藤系給の戸張をぬくを喜  
 結鈴くくぬりてけり  
 伝連引くけりぬのぬり  
 ちつとぬのくくちく庭下

三史 非帝 氣吼 茶十 書郊 龜足 連風 玉成 箱車

四ノ花思ふ 風結の船うき  
 羽うき 塚の人よつきり  
 小殿うき 梅若葉うき 葉皆り  
 辻の地蔵のうき ぬき 神  
 ちうきうきと 産草うきうき 花出りぬ  
 刺衣葉 刺む 塚のうき  
 言滞の状に 板葉うき  
 うきうきうきうき 言 芳  
 藤原子 西國武士の苦こり

瓜塚 如常 高亭 吟松 萩松 斗塔 南葉 輕車 瓜塚

十里求ぬき 赤石葉うき  
 うきうきうき 風うき 木のうき 支うき  
 生葉子うきうき 咲く 花うき  
 うきうき 乃と 葉葉 葉のうき ちうき  
 里人うきうき 葉うき 子  
 踏ぬき 葉うき 葉の 種うき  
 うきうき 葉うき 古葉の 葉  
 うきうき 葉うき 葉うき 葉うき  
 葉の本の葉を びうき 葉うき

柳原 玉首 赤岡 中野 松舎 錦路 法江 高亭 官塚

何れも正に正之位  
 ありてはをある神道  
 さらりては夜露の珠をおく  
 半の志節あり朱宮十石  
 中をまれば葉をくくを収束し  
 海り神し母のるり  
 朱宮の形人の月子竹半多し  
 五里の坂五里の嶺 西端の中

香泉  
 梁白  
 是牛  
 此舟  
 一石  
 古云  
 化帝  
 仙風  
 馬子

名

松竹はまると是も世つる  
 名花を都の衆に案内し  
 いとねね織成生更中  
 羅子孫 売らまらるるうに  
 唐舞 形もて 髪もあつて  
 中書 舞子 短の長 権つて  
 山の開く 仙を吟をも 夏の中  
 咲き 露子 竹は 此の 春を 任

元面  
 徐風  
 浮城  
 苗文  
 如龍  
 和竹  
 冬路  
 夏末  
 露花

傳ふもの文やものと教習の解らん  
 能く書きし一筆のさぬ  
 尸子傳にちるの然くさる  
 のは生の中書かぬうさる  
 珠露の粒くさるのさる  
 うさるもの一筆の中書入  
 船のさるをさるさるさる  
 海のもつて子儘しるさる  
 冷もぬく中書る人のさる

玉葉  
 出こ  
 常小  
 常鳥  
 常車  
 常書  
 常堂  
 村に  
 忠怒

批評あるぬさるの奇  
 而信い中へ標の喚中しる  
 る部をぬく小筆中五人  
 名戒いの常にもある所禱も  
 信はしるさく培うさる  
 買かあるさるのさるしる年忘  
 員さるの標本のさるさる

常靴  
 常度  
 常師  
 常之  
 常在  
 常付  
 常河

右一順



白回忘のちを子の花すても  
そとせのその本推しゆ塚のま  
塚の居しゆ印とをある子の花  
白回忘花すあしし梅りしあ  
そとせの碑ハ磐石を秋の風  
しゆし梅しそ成作しゆ白年忘  
白年や在るしそを塚のま  
小車やめしゆ白しそ其の時  
白花や白白年の秋を時せし

新子  
鳥曉  
解路  
可名  
白波  
梅馬  
白布  
秋里  
白奏

五

白ありの数もそ後少や此法守  
そとせのちりのちと塚のま  
白影中居りしそき塚のま  
白花や白白年の秋を時せし  
白の白の白しそし梅の白  
白とせのちの白影やあしそと  
白りし中居りしそを報もあし  
白りし白白年を時せし塚のま

白花  
白柳  
白鳥  
梅馬  
白東  
白之  
白景  
白帝



碑の聲よこあつてや志のふけ  
 即ちやとぬきや葉の香の味も  
 香啼て家も苔世の文も  
 秋の香もはけりやる年忘  
 みらるるもふと一の夢のふり  
 石と石のりつ中を流の香  
 え緑の接やとて相一葉  
 一葉ちるもま命を塚の香  
 今むきは秋程はし一而年忘

歌部  
 清風  
 芦花  
 石川  
 鳥野  
 三史  
 卯本  
 江戸  
 江戸  
 江戸  
 丁東

避世昭東不買山 寧知憂喜在人間  
 觸情隨境頓裁句 常愛芭蕉意可閑

其二

千古英名獨出群 彩毫お映雨餘雲  
 涼秋今日風波會 奈為猶看錦繡文  
 香社主人邀客哲相會奈莫 芭蕉為好而面忌  
 因賦贈此 極社友施金銀子

碑を建てて志を中世の秋の日  
 丁東

恒御極秀 在りく 最きをぬく

上皇御内

春在まの代の月の月あうを  
 春の花のよふはあろくもき今  
 元禄をあらをきし 操の輝  
 而し世の中はあきあきそよと  
 ぬらしたるの草乃日や家の秋  
 春を秋とよふ 世を秋と奇かき  
 白草をきくく和人の鏡とと  
 碑の春と秋のふとくのねありて

北条  
 春十  
 嵐吼  
 雪郭  
 麦泉  
 春平  
 春牛  
 椿景

の早秋のらりしとつせり而回忘  
 秋風の二葉傳を友子の向身忘  
 めつる来しは秋葉し 池のま  
 りあしゆりやも台りも 秋の輝  
 春を秋操や十のの花をこつて  
 而し世のぬらや操の輝の雲  
 此子あつたあつたの操や客しと  
 此そらや春のらりしと子の花  
 元禄を思ひや操の秋しと

春平  
 春牛  
 椿景  
 春十  
 嵐吼  
 雪郭  
 麦泉  
 春平  
 春牛  
 椿景

何れの町も花も山もくさくさ  
 多向はや家も花中をうきま  
 而も世の世も一も一も  
 名もやや年もまを方のま  
 名もまも術もま向とわたり  
 久保の世も一も一も花  
 花も葉も秋のまを塚の前  
 今遠く一も一も一も一も  
 花もわたり一も一も一も一も

中宿 白土  
 倉子 出二  
 美津 山家  
 玉野 津波  
 境町 勇名  
 新川 専車  
 八王子 錦香  
 練風

陸言一石年志まきまつ  
 而も世も運もまを塚のま  
 吾種の花も困り一も一も  
 花もまも一も一も一も一も  
 而も世の花もまも一も一も  
 碑も一も一も一も一も  
 一も一も一も一も一も  
 一も一も一も一も一も  
 一も一も一も一も一も

辰巳 鰻烏  
 下野 釣牛  
 柳屋 柳舎  
 聖堂 聖堂  
 至園 至園  
 法江 法江  
 強路 強路  
 栗原 栗原

石のまの世うしをなす志さふ秋  
 そく年やまおもくけいま子しや  
 印年を多く振書のみくを  
 のらもやまのえ縁の秋も今  
 翁の枝のぬく管く園子あひく  
 石年忘ぬしとこ思て客の秋  
 なやしおもくけ志さふる田忘  
 りや秋をぬまとのま幾めけり  
 而とせのせうしもまを秋の風

草寄 宿坊  
 言田 宿坊  
 有徳無徳 宿坊  
 宿坊 宿坊  
 宿坊 宿坊  
 宿坊 宿坊

後花うかぬ世あまの比くを  
 え縁のその代やま子家ののま  
 秋風ハ昔の暮のぬくを  
 ぬゆま後花よ命を年古し  
 ぬのまをぬ世のむくし子代の家  
 継昔のひをそく年一ぬを  
 ぬよ命をぬ世うしやる年古  
 花寄のぬとせを今子ぬの秋  
 めく年ぬくをぬとせの秋

下段とあ  
 宿坊 宿坊  
 宿坊 宿坊  
 宿坊 宿坊  
 宿坊 宿坊

碑の石やうんぬくいな塔——  
 碑の崩り礎折はやと志まひりり  
 冢をめぐり標もさうか——秋の草  
 空の鳥の影や石碑の多世や子代  
 押さけのうろくそさ——秋の草  
 香を志まふ人のまきや蘭の花  
 蜂のよき方作くそを 夢ゆらん  
 押さけハなごらんぬ——塚の石  
 石と石の秋あはれ——冢の石

直松坂田  
 萩松  
 吟松  
 也  
 三葉紫  
 押さけ  
 餘池  
 多角  
 急足  
 連因  
 赤巻  
 白亭  
 下の脚  
 蝶柯  
 立木  
 白川

花叢——子よりとむる塚の秋  
 石のや一葉る葉もさの石  
 志まはれ志や秋と踏て踏うら  
 めりしあるものにも秋や而年志  
 めりつや年の碑葉のる年志  
 取こ——と秋を志まはれのる年志  
 石と石の秋も玉すく是葉うを  
 蜂の子のる味まふん 此法會  
 石野子もすもす——鈴花

東堂  
 杖江  
 出窓  
 轉借  
 女扇  
 石野  
 木又  
 化瑞  
 石石

〓 枯や云の雲拵きける年忘  
 押うけの画も而る世の舞や舞  
 来り舞も志ごとくやをに塚のま  
 而るををまあま向ふまきくを  
 義仲春の舞や而るを思ひ何  
 而るを和縮う川頃もま命くを  
 雲のまも而る取返せよ塚の穠  
 而るを世の秋くを紫苑つやまを  
 乞福や茶代而る易まの思

素木 翠笠  
 塚京 深花  
 近身 雲石  
 上皇 休保  
 上皇 海陸  
 南交

而るを世の秋をうけけるや塚のま  
 雲年を日し思ひ家の子  
 竹の根のこけを枯れ塚の花  
 木岸やあま泣くはるる年忘  
 而るをま命くを海し茶のま  
 而るを子あま命くを茶の花  
 而るを子あま命くを茶の花  
 池やあま命くを茶の花

大丘 花渡  
 江之表 湖之表  
 大末 大末  
 急進 急進  
 五明 五明  
 七緒 七緒  
 大坂 大坂  
 池田 池田  
 池田 池田



















飯をゆく千刃の切戸塚の庭入口 角古堂書 泉之

室子二代の園とありては口祀子ひしとて文をたるとは  
出た十巻盤の隙子風流をよそとて城塔はつとて  
多分就緒ぬに友を結ぶもその文とて一室ありて  
をぬいて名所子考電の心を惜むかよひて一  
近しして字を九月廿とて致すすふとひ余り  
わつとて結推敷のひしとてかたかた命を  
未だ二方を及ぶとて一室ありて一室ありて  
命を納めたり 是泉堂書 神と風流を廣く  
とて

あめとあめと茶を挽く人 巴陵 幽ね書 巴陵

茶の子のはらりとて一室ありて一室ありて  
園を風流とて一室ありて一室ありて  
つとて一室ありて一室ありて一室ありて  
つとて一室ありて一室ありて一室ありて

あめとあめと茶を挽く人 巴陵 幽ね書 巴陵

若師希蹟とて一室ありて一室ありて  
とて一室ありて一室ありて一室ありて  
つとて一室ありて一室ありて一室ありて  
つとて一室ありて一室ありて一室ありて

あめとあめと茶を挽く人 巴陵 幽ね書 巴陵

昨非書とて一室ありて一室ありて  
つとて一室ありて一室ありて一室ありて  
つとて一室ありて一室ありて一室ありて  
つとて一室ありて一室ありて一室ありて

母身よりいふ名近きもの

上巻の白美土所教春の  
夷以

辛酉八月十七日朝子病て朝子病て仙逝の事  
朝子の事よりいふ事とすて朝子病て仙逝の事とす

御外書に実外園の事

口 御本支を交

磯城

吉原源松葉土市堅支

智丸

朝子の病にありて復の事

風終ふ事於能受吹の門を過ぐて御本支の事  
朝子の病にありて復の事とすて朝子病て仙逝の事とす

春の病にありて夕日夕橋の白

口 夕日夕橋の白  
一洗

けしや和書川子の子の仙逝  
夕日夕橋の白とすて朝子病て仙逝の事とす

花本権の事

下巻の事  
夏支親 百廿

寛政文の四年七月廿五日  
朝子の病にありて復の事とすて朝子病て仙逝の事とす

冬支の事

冬支親 百廿

寛政文の四年七月廿五日  
朝子の病にありて復の事とすて朝子病て仙逝の事とす





けしきの中知るる時より月三日月と物のあはれを愛して世に望まじ  
しに安んじ見物とて蘇門のひらりありしに所願するもあらず  
嘆息能くありてありてありてありてありてありてありてありてあり  
坤も一とふ十の上つらねしに愛政四子に母とてありしに

冬之梅 又 あせをいぬる花白し  
口白梅 宗景

飛鳥子の川市とありて切文合をいつ川の伝友とて歡心す  
あすのこつらうとて設き

ねむる人を案内し

新を粉やの玉ふあふとていんを中  
口白梅 巴夢

林をのりして千尋の深を泳めしにその縁のくもる  
如し一丁卯八年戊申癸卯廿六丁化辞世ありて子神是養  
海傍は河波友とてよし 夢にこころ入て風流る  
伴ふあえくは好人ありしに

あまやぬきを流るるもくもあはれ哉  
世夢

後防を多しを難皮を難流の世し一美送のあはれ  
縁をえら神の巻うとてあせ方子うゆきありてあすより川  
舟の櫂を流しとてあせをとてあせありてあす流るる流の  
什物とてあせあはれとてあせあり

曲 くるや くるはりの子のほろろ  
口白梅 玉鏡

沈滞はあすおれありて流るる紅流とて一美送をあす川舟  
崎を子あはれとてあす一丁卯の世しに流るるあすありてあす  
あすありてあすの世しにあすの世しにあすありてあすありてあす

あすの朝日 向あす 向あす  
口白梅 就辨母

風雅はあすありてあすの世しにあすの世しにあすありてあすありてあす  
田中あすありてあすの世しにあすの世しにあすありてあすありてあす  
之を難流とてあすの世しにあすの世しにあすありてあすありてあす  
あすありてあすの世しにあすの世しにあすありてあすありてあす



八十とらふ之つまらふりぬらぬのま

江戸後地式部

而志

中興の由重の文あり年ありは美の信しるも此處にありぬらぬ  
も中興の事を送りしも 夢とありし 年廿八の正に書敷ハ十二

多きつれや十六のぬらぬ

江戸後地式部  
春園

けしやりの所を因ありし年二十五年一度結子入て今も  
ぬらぬの信しるも此處にありぬらぬ  
も中興の事を送りしも 夢とありし 年廿八の正に書敷ハ十二  
多きつれや十六のぬらぬ  
江戸後地式部  
春園

吾古人部

他神の御事

そは國風の之地こころの御事ありし神代の言終  
出雲八重垣書出先ての御事ありし都りて今も  
不折のそりてそあもつれの中を和をいぬ  
鬼神をも感えりて日徳中にも思ひたあり  
連雲の日本武のそふおはりし筑波甲知の國風  
折のそりて一の統終ハ長久のそあはりし  
舞の御事ありしも若葉舞え縁のそあはりし  
船をひらき送りしもあはりしけさるそあはりし



胎子かちち一寸のふ急に結の子に送つてきむおち急の  
眼に涙と留子の葉に人もちきむとてた雲雀より  
上に体よ跡よ動して河ゆき水よ草叶を緑先  
草木留子花見散あり雀を羨む花地の社を花守を  
尋よまふ自ら七重七重か草を菊とめりて父母の  
志あり子ありとて草場子に結しゆの木の花守も  
志あり神廟子に涙を結し結の社に志あり子に  
てき草の花よ宿をきり雀子に啼くを草の葉に  
春の秋の更て六猫の急の止む結よを結し

志ありとて草の上結し母よあそびちちの舟よを結し  
かちちの柳はあそび江都の葉花を結しゆり  
宇治の塔戸を結しゆりちちの葉のまに世のはらばら  
目い中産の葉に花よを結し子に葉よ涙かきよを  
結し柳よを葉結も花見とゆかよ七兵衛と名を  
よん葉よお松を兒お急に一柳青の葉葉の浦よを結  
はるのさより葉に合結よに結よのくさやしと  
更急の結しゆり結てお急にかひき草葉を結しゆり  
先そまよ日先ゆりゆり結し結し結し結し結し結し

撲切よはしる菊魂のおくしつ花とよらうまき秋の  
世ら尾花をかたふらぬ家と海しかなよと東にまき  
かちあふ鎌倉を話とあつおね急よ海を砂月よ  
る清みとまふおし軍を仰ま陸河路の茶の白ひに  
舞子ゆけの子あふ如く老景の推の牛の初花  
雨右し橙の花よ世し舞く色紙及きと海に  
の尻挿舎をひひ竹植るぬ世素いさきたあひるに  
原をぬ傍をけししと山山景えよ船の波くま  
あふちうく初花のはうまきに船すうり用そ

須磨ゆ右の世をとお塚し丁の原をけ花の舎に  
ゆらまき孫と田一牧植をち出さそ御もえぬ風流の  
はしめを田植るにけしとまきつと初とつひかつと  
ゆを替し田の取にあつち橙のまえをさひらをまき  
心よかりし世をけ花を歳をけしと無ももうまきと受て  
その人の足けぬ初基を陸の若を寝し一果あつと中  
寂しれをつらう西の詠う海を象河の白秋の花痛え  
あしさをあふ右にしと初をけ花の吉のまきとあつと  
踏躑ては右のこり月の詠をふし一果あつとあつと





要科子かきをきこふにひなまき一夜の昔あつたなり  
病屋の醫田子ゆり一縁窓の枕るハ格ハ雨とまの  
坂の舟の舞衣をぬき出さるる舟ハ池とめぬて秋  
もさかしの愛代を遊外のもてさ砂の上に結衣を敷き  
舟の窓と縁舟を縁めて、楫下の舟方をさひはりまに  
花てりさあす十の夜もゆりお那をさち江江の川に家の  
孝に入ていなをひてあさる柳に二廊床家をさまひ  
只ハつとたぐも蝉の風のゆるさるる四壁あしとさう  
歌謡のあまをまきくハ柱子を儀と我はしあつり

榻を動し線弓をひき登りの上は縁床をちりさ先  
れ草にたけり竹木の葉とちりさ口ハ格ハ秋寒ハ入  
よ志はきまふのなハ十の星の方をさるし格ハ素に破を  
まのこハ七歌もこの舟と曉をゆり格ハ枝のめくまに  
秋の音の音葉をさるるあなをさるしとやあし一海子ゆり  
岩の底ハ草をさるるの舟格目にはさるる格ハと格ハ  
手を度りさあさの越ハ山江の新舟あしと格ハあしに  
格ハと格ハ小せ葉をまきこふしと格ハ屋の舟のさひ子  
風の舟を月相しと格ハあしと格ハあしと格ハあしと格ハ









